

## 「葦」第53号発刊に寄せて

奈良県立医科大学附属病院 病院長 吉川公彦

この度、附属病院看護部における看護研究誌「葦」第53号が発刊されることになり、おめでとうございます。

日々の忙しい看護業務の中で、研究テーマを見つけ、関連文献を読んで、研究デザインを構築し、調査を行い、結果をまとめ、学会発表、あるいは論文発表することは大変な労力を要するため、できれば研究なんかやりたくないと感じている人もおられるでしょう。あるいは研究テーマを何か出さないといけないと思ひ、日々悩んでいる人もおられるのではないのでしょうか。

しかし、日々の診療や看護において、きっと看護師の着眼点で疑問点や改善点があるはずで、このような気づきが全くない人は日々の業務を単に機械的にこなしているだけで、そこに進歩はなく、その集団は停滞あるいは後退してしまうかもしれません。最近インターネットやSNSの普及により情報はあふれており、多くの疑問点はすぐ調べることができますが、的確な回答が見つからない場合や回答があっても自施設や研究対象に当てはまるわけではなく、また中には間違った情報もあります。

自ら研究疑問（リサーチクエスチョン）を設定して研究を行い、新しいことが明らかになり、学会や論文で発表し認められ、またその成果が担当する部署での業務の改善や進歩、そして患者さんの看護の質向上に役立つ、あるいは選択肢が増える、これこそが研究の醍醐味であり、さらなる研究のモチベーション向上につながります。ただ、看護研究を始めるにあたって、実現可能性、新規性、倫理性、社会的必要性の有無、デザイン、サンプル数等クリアすべき項目が多く、このことが研究活動の推進の障害となっています。

奈良県立医科大学では2015年に臨床研究センター（Institute for Clinical and Translational Science; iCATs）が設立され、看護師もスタッフとして常駐されており、2017年から看護研究に対しても相談や支援体制を開始していますので、是非、気軽に利用していただき、専門家のアドバイスを受けながら質の高い看護研究の継続に努めていただきたいと思います。

日々進歩する医療現場において、質の高い看護を安全に実践するために、看護研究は必須事項です。今回「葦」に掲載された研究を軸にさらに活発で斬新な研究活動が継続して行われることを切望します。